

いま高校教育も大きく変わるとき

課題に主体的に取り組む力を生徒に身につけさせるために

文部科学大臣 下村博文

これまでの大学入試センター試験を廃止し、新たな学力評価テストを導入。同時に高校教育と大学教育も大転換する——昨年12月の中教審答申を受け、文部科学省ではいま「高大接続改革」のための制度設計が進んでいます。下村文部科学大臣から高校教育現場へのメッセージをいただきました。

まとめ／広重隆樹 撮影／西山俊哉

少子化、グローバル化の時代を幸せに生き抜くための力

その力を学校教育で育成しているかを問う 大学入学者選抜改革

近代工業化社会を経て、社会全体が高度な情報化社会に変わりつつあるのに、教育は明治以来の旧態依然のままということが最大の問題です。均

一の製品を大量に生産することが求められた時代には、教育も画一型でよかったかもしれない。しかし、情報化社会では、画一的でなく個別ニーズに即した物やサービスをいかにクオリティ高く生み出すかが重要なのに、教育がそこに追いついていない現状があります。

日本社会特有の少子高齢化の間

題も看過できません。労働人口の減少をすべて移民労働力で補うわけにいかないとしたら、一人ひとりがもてる力を今まで以上に発揮しなければなりません。子どもたちの潜在能力を引き出すのは一にも二にも教育の力なのです。

職業の形も、会社の仕事も、人々の生活も変わる。そういう社会で幸せに生きようとするとき、若者に求められる能力は何か。一つには課題に対して主体的に取り組む能力。これがあればどんな時代にも新しい道を拓くことができます。さらに企画・創造的な能力も重要です。その一方でロボットやコンピュータがどんなに発達しても、優しさや慈しみといった人間

